

著作賞

土井清美『途上と目的地』

(春風社 2015年8月)

<講評>

本書は、著者の博士学位論文『サンティアゴ・デ・コンポステラへの徒歩の旅に関する民族誌的研究——「間」における生——』（2013年）をもとにしたものである。

本書は、これまで巡礼研究が主にあつてきたような宗教的中心地としてのサンティアゴ・デ・コンポステラではなく、そこへ至るまでの途上に注目し、徒歩とそれによってとりむすばれる「途上を歩く人々」の、表象に還元されえない諸活動とその周囲の諸物との関係性を検討するものである。序章で述べられているように、本書各章における論考を促しているのは、民族誌的記述と理論的考察を架橋しようという企てであり、一般的には両立しがたいフィールドの現実を総体的に把握することと、理論的な精緻化を目指す研究の双方を把握することが目論まれている。そのためにサンティアゴ徒歩巡礼を旅や場所、徒歩の問題としてとらえ、フィールドワークで直接経験し把握できる限りのもの、すなわち現れるものが検討されることになる。

本書の概要であるが、理論的背景や調査方法について述べた序章のあと、第1章ではサンティアゴ徒歩巡礼の地理や形成史などの基本的情報が整理され、第2章では決まった方向へ歩く巡礼者の集合的パターンとその堆積のなかで生じる変化が描出される。ここでは日周期的な反復的動きが次第に場所と身体双方において巡礼者の認識を変化させることが指摘されている。第3章ではドゥルーズのマゾヒズム論を援用して途上と目的地および苦痛や快といった身体的な・物質的・感覚的経験の接合面に注目しながら考察される。第4章では、路上の諸物に対してとりもつ徒歩巡礼者の間で地続きのランドスケープを「ウォークスペース」として論じる。第5章では「ウォークスペース」を「遠近感」、「リズム」という切り口から整理を加え、巡礼者の集合的な認識の形成プロセスと、それが通常において差異を内包していることが明らかにされる。第6章では、「住まいつつさすらうこと」という概念でまとめるような場所との関わりがあつかわれ、「ホーム」が「近さ」と「遠さ」からとらえられている。終章は結論部分であるが、場所とフィールドワークの問題としてこれまでの議論を整理している。

ここで観光研究としての本書の意義についてふれておきたい。観光研究がこれまでとらえてきた巡礼は観光という事象の下位形態としての巡礼であり、観光史においては観光のルーツとして巡礼を位置づけることが多かったが、本書はこうした観光研究における通念的な巡礼認識に対して、新たな研究枠組みの可能性を提示したといえる。すなわちそれは目的地としての巡礼地を後退させ、徒歩による途上とその経験の広がりによって巡礼をとらえ直そうという視点である。さらに終章の最後の部分で、「展望」として言及される非労働主義的、非目的性的、非有用性的、非成果的、非経験的消費型ツーリズムとしてのサンティアゴ徒歩巡礼という問題の投げかけは、バックパッカー研究などに代表されるような既存の観光研究とつながる可能性も秘めている。

本書は著者が企てたようにフィールドワークの豊富な成果をもとにし、注意深く理論的な検討を各部分で重ねながら、民族誌として全体が組み上げられている。紹介される先行研究や理論について一定以上の予備知識がないと、十分に理解できない部分もないわけではないが、全体的として比較的平易で分かりやすく、観光研究の専門書として優れていると同時に、知的で楽しい読み物にも仕上がっている。こうした諸点から本書は著作賞に十分値すると判断される。